

第4章 反復帰論の淵源 —1950年代の『琉大文学』を中心に—

はじめに

1 反復帰論の概要

- (1)新川明による反復帰論
- (2)『琉大文学』に関する先行研究

2 沖縄民族意識の目覚め

- (1)琉球大学入学まで
- (2)6号における転換と沖縄民族意識

3 沖縄における日本の文学論争の受容

- (1)社会主義リアリズムの影響
- (2)国民文学論の影響
- (3)日本の文学論争の受容

4 先輩世代に対する抵抗心

- (1)痛烈な批判
- (2)批判構図の類似

おわりに

第4章 反復帰論の淵源—1950年代の『琉大文学』を中心に—

沖縄に限らずその国なり、地方なりの文化や伝統とか云った場合、どうしても民族的なものときりはなせないと思います

新川明「沖縄における民族文化の伝統と継承」『琉大文学』第8号（1955年）

はじめに

1969年の佐藤・ニクソン会談によって表明された「核抜き・本土並み・72年返還」は沖縄で期待された基地撤去をもたらすものではなかった。この期待された復帰と現実の復帰の差異があらわになってきた時期に登場したのが反復帰論である。反復帰論者として沖縄タイムス記者の新川明や川満信一、琉球大学教授の岡本恵徳らが知られている。中でも新川明は反復帰論の代表的論客とされており、1972年の復帰前後には沖縄の新聞、雑誌だけではなく日本側の雑誌などでも数多く取り上げられた。そもそも反復帰論という言葉が初めてメディアで用いられたのは、1970年『新沖縄文学』18号の「特集『反復帰』論」および19号の「特集 続・反復帰論」である¹。

当時その主張は十分に理解されなかったが、1990年頃から国民国家論などが盛んになるにつれて、反復帰論は積極的に評価されるようになったといえよう。例えば、2005年には『世界』に新川明のインタビュー記事²、2006年には『季刊前夜』の9号で反復帰論の特集が生まれ、『戦後思想の名著50』では新川明の著書『反国家の兇区』がそのひとつに選ばれている³。近年、反復帰論に言及した論考として、「再考・反復帰論と独立」⁴、「ウチナー／ヤマト」をめぐる現実の複雑さと二重性⁵、『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』⁶、「反復帰論が問いつけるもの—国家に拠らない、真の自立のために」⁷などが挙げられる。また、2008年には反復帰論を中心テーマとして取り上げた学術書『反復帰と反国家』が出版された⁸。

このように今日注目されている反復帰論は、端的な表現が許されるならば、沖縄民族意識に依拠することにより、日本という国家を否定する思想であった。本章の目的は、この反復帰論の起点を探り、形成された要因をあぶりだすことである。

そこで、反復帰論の淵源と考えられる1953年から56年にかけて新川が精力的に執筆活動を行っていた『琉大文学』に掲載された記事を主に扱う。また同時期に『琉球新報』に掲載された短歌に関する連載記事や、いわゆる「琉大事件」について言及のある『沖縄文学』の文章などこれらも含めて分析し、その思想的淵源を検証する。

結論を先取りして言えば、反復帰論形成へ影響を与えた要因は、①沖縄民族への目覚め、②日本の文学論争の受容、③強烈な先輩世代への抵抗心、の3点であった。その結果、反復帰論の重要な特徴である沖縄意識や反権力性はこの時期に形成されたと考えられる。

本章の構成は、まず反復帰論の特徴を確認した上で、『琉大文学』に関する先行研究を概

観する。第2節では沖縄民族意識の発露に着目する。第3節では日本における文学論争が沖縄でどのように受容されたのかを確認し、第4節では当時沖縄の文壇で活躍していた世代への強烈な抵抗心を当時のテキストから抽出し分析する。そして最後に『琉大文学』時代の反復帰論への影響をまとめ稿を閉じる。

1 反復帰論の概要

(1) 新川明による反復帰論

1960年代において最高潮に達した日本復帰運動は、新川によれば米軍による圧政下で起きた「民族的な集団ヒステリー症候群」と表現された⁹。沖縄が復帰することによって日本という国家へ組み込まれていくことは、意識的か無意識的かを問わず沖縄の個性を没し、国家という権力に飲み込まれることであると新川は規定した。さらに1972年の復帰は日米両政府の権力者によって敷かれた不条理なルールであり、しかもそれは幻影と仮説に満ちていた、とした。そして新川の反復帰は「<国家>への合一化を、あくまで拒否し続ける精神志向」であり、「反復帰すなわち反国家であり、反国民志向」であった。新川にとって国家は不可視の強制力であり、その強制力によって人間の思考と行動を規制し、さらに国家を補強させる存在様式であった¹⁰。ここにあるのは単に日本復帰か沖縄独立かという単純な選択肢ではない。国家の持つ、同化を強いる暴力性が鮮烈にえぐり出されている。

そして、新川によれば沖縄は日本とは根本的にことなる性質を有している。その異質性を基礎にすることにより、同質化を強制される日本志向の復帰思想を打破することが可能となる。こうして沖縄を反国家の拠点とし「沖縄の存在をして<国家としての日本>を撃つ、つまり国家解体の爆薬として日本の喉元を扼することができる」というのが新川の反復帰論である¹¹。

しかし、新川は単純な独立論者ではない。新川は沖縄が単に独立することは偏狭なナショナリズムの結果に過ぎず、それはミニ・ジャパンを作るのと同じでありなんら意味がないと繰り返し語っている¹²。国家の否定は「沖縄国」に対しても適用されるのである。

このような沖縄民族意識に基づいた思想である反復帰論が形成された原点として考えられるのが、新川らが大学生の時に創刊した『琉大文学』である。そこで本論に入る前に『琉大文学』に関するこれまでの研究を概観する。

(2) 『琉大文学』に関する先行研究

『琉大文学』は琉大文芸クラブ（後に琉球大学文芸部に改称）によって発行された同人誌である。創刊は1953年であり、ほぼ1年に1、2回のペースで刊行された。1976年まで続いた『琉大文学』は沖縄で活躍する多くの文化人、言論人を輩出し、戦後沖縄文学および思想に大きな影響を与えてきた。『琉大文学』を初めて研究対象として取り上げたと言われるのは鹿野政直である。

鹿野による 1987 年の『『否』の文学—『琉大文学』の航跡』は『琉大文学』研究における先駆的論考である。鹿野は、『琉大文学』を「若き思想家たちの拠点」として位置づけ、その変遷を追い、そこで特に 1954 年に刊行された 6 号の転換に着目している。その理由として沖縄戦後文学史に残る批評が掲載されたことを理由に挙げ、新川によるものでいえば 6 号「船越義彰試論—その私的小説的態度と性格について—」、7 号「戦後沖縄文学批判ノート—新世代が希むもの—」、8 号「われわれ内部の問題」（北谷太郎）がそれにあたる。『琉大文学』は 5 号までは芸術至上主義的な意図のもとに作られていた同人誌であった。しかし、「経済」学（すなわちマルクス）を学び、アメリカ軍による基地建設に伴う土地接収が進む社会状況において『琉大文学』のメンバーたちは政治へと目を向けていったのである。ここでは同時にマルクス主義のほか国民文学論の影響にも言及されている。

鹿野は『琉大文学』上で新川が行った船越義彰への批評に着目した。新川は船越の小説を「私小説的」「逃避的」態度と決めつけていた。船越は当時、新聞に小説を連載しており沖縄文壇を代表する人物であったが、新川は船越個人のみならず、文壇自体も批判の対象とする。鹿野はこのような新川による「総否定こそ、この評論の核心であった〔傍点原文〕」。その評論の画期性は認められたものの、具現化としての小説や詩などの作品が著しく見劣りしていたことも指摘している。

鹿野はさらに新川による詩『『みなし児』の歌』、『『有色人種』抄』を引用し解説を加えている。『『みなし児』の歌』は「しばられた現実のなかで歩きつづける決意と、そうした現実を人間の名で拒否し抜く意志を示し」、『『有色人種』抄』は「抑圧者のなかの非抑圧層・被差別層にたいし、おなじ被抑圧者・被差別者としての論理と感情をこめて、連帯を呼びかけた」というものであった。なお、『『有色人種』抄』をきっかけとして 7 人の学生（うち 4 人が『琉大文学』メンバー）が米軍により退学・謹慎処分されるという、いわゆる「第二次琉大事件」が発生した¹³。

次に新城郁夫は、「戦後沖縄文学覚え書き—『琉大文学』という試み」において、新川による「戦後沖縄文学批判ノート」、とくに沖縄の戦争文学に対する批評を中心に分析を加えている。終戦直後の沖縄戦争文学は日本軍の視点に立脚していた。すなわち、多くの一般住民が戦闘に巻き込まれたにも関わらず、住民の描写がなく、自己批判を欠き、さらには占領者である米軍を賛美するというものであった。そのような状況の下、沖縄タイムス社編『鉄の暴風』、仲宗根政善『沖縄の悲劇』、大田昌秀・外間守善『沖縄健児隊』など「沖縄人の立場」から語られた作品が現れた。これら作品の意図は沖縄戦の事実を記録することにあつた。しかし新川はこれら「沖縄人の立場」から描かれた作品へも批判を加えていく。そこには被害が強調されるのみならず、その被害が美しい犠牲者として描かれてしまうことに危惧があつた。そこで新川は犠牲者を生み出した日本の絶対天皇主義の本質を見極める必要性を説いたのである。また、新城は『『有色人種』抄』に対しても占領下文学としての価値を認めており、再評価される必要性を訴える¹⁴。

マイク・モラスキーは 2000 年に出版された新川の私史的評論集『沖縄・統合と反逆』か

ら新川の半生をまとめ、その上でやはり『『みなし児』の歌』と『『有色人種』抄』を扱っている。モラスキーはこの二つの詩をアメリカ軍統治に対する挑戦、憤りであると同時に、日本に対するアンビバレントな感情と、リシリズムへの誘惑があるとしている。また、黒人との連帯を訴える内容から、後に顕著となるナショナリズムやネイション・ステイトへの抵抗の種が見られる、と指摘している¹⁵。

呉屋美奈子は1950年代に『琉大文学』の主要メンバー、すなわち新川と、後に沖縄初の芥川賞受賞作家となる大城立裕との論争を整理し、まとめている。この新川と大城の論争は『琉大文学』が刊行された1950年代中ごろに行われたものであったが、2000年前後に再燃した経緯がある。呉屋はこの議論を「政治と文学」の関係をめぐる論争と規定している。『琉大文学』は当初芸術至上主義であったが、米軍の弾圧を受けた結果、文学でもって政治に抵抗するという姿勢へ転向する。さらに批判の矛先は既存の作家へも向けられ、大城もその例外ではなかった。大城が「政治と文学」に言及したのは琉大事件後、『琉大文学』が復刊したときである。その趣旨は、これまでの『琉大文学』による批評の意義は認めながらも、政治に偏りすぎた『琉大文学』はもはや独自の文学を目指したものではなくなった、というものであった。新川はすぐさま大城へ反論し、大城の様に文学と政治の関係を無視し割り切ってしまうところに極端な閉鎖性と狭隘性があると主張した。ここから議論は「主体性」とは何か、を問うものとなる。大城によれば社会主義的リアリズムという借り物で語り描くのではなく、自身の言葉でつむぐことが「主体性」であった¹⁶。

浜川仁は『琉大文学』における新川明や川満信一の論考を批判的に論じたうえで、彼らの目的は日本の進歩的知識人へのアピールであったとした。その結果として「反戦平和」としての「沖縄文学」という特異な領域を囲い込み、日本文学からの分離に成功した、としている¹⁷。

以上が『琉球文学』に関する先行研究であるが、ここから反復帰論に影響を与えたと思われる要因を5点挙げるができる。①米軍の圧政に対する抵抗としての文学、②社会主義リアリズムやマルクス経済学との出会い、③すでに活躍していた世代に対する批判や対抗心、④米国内に存在する差別を看破し連帯を主張するに至った思想、⑤国民文学論の影響、である。近年の新川へのインタビューや座談会でも上記のことが確認できる¹⁸。

先行研究においてすでに様々な要因が指摘されてはいるが、各要因の関係にまでは踏み込まれてはいない。そこで本章ではこれらの指摘を踏まえた上で、各要因の関係に重点を置きながら考察していく。次節ではまず、新川明が琉球大学に入学するまでの生い立ちをまとめ、そして『琉大文学』時代において意識されたと考えられる「沖縄民族」について論じていく。

2 沖縄民族意識の目覚め

(1) 琉球大学入学まで

新川明は1931年、沖縄島中部に位置する北谷村嘉手納に沖縄出身の父親と本土出身の母親の次男として生まれる。3歳のときに父親が死去し、37年、母親と共に石垣島へ移住し、46年まで過ごした。幼いうちに父親を亡くし、ヤマトンチュ（大和人）の母親に育てられた生活は貧しいものであった。

新川は12歳の時に八重山中学校を受験するが合格できなかった。その理由は、当時の試験が筆記ではなく体力テストであったためである。試験当日体調を崩していた新川は体力テストを受けなかったため、試験を通ることができなかった。新川は時代が勉学よりも体力のある戦争に役立つ学生を必要としていたと回想している。また、戦前までは新川は皇国少年であったという。しかし敗戦後、規律をなくした日本兵が若い女性に卑猥な言葉を浴びせ大飯を食らうだけの姿を見て失望する。しかも新川は貧困ゆえに、その日本兵から残飯を乞うという生活を強いられることになる。戦時下での中学校受験失敗と、敗戦直後の日本兵の姿、この二つの経験が成人した後の考え方に影響を与えた、と新川は述べている¹⁹。

日本人の母親に育てられた新川は、石垣島に移り住んだためウチナーグチ（沖縄語—沖縄島で通用する言葉）を獲得することはできず、ヤエヤマグチ（八重山語）を聞き取れるようになるのみであった²⁰。

このような環境で幼少期を過ごした新川は、終戦後沖縄島へ引き揚げ、沖縄島中部にあるコザ高校へ編入する。そして米軍政府下で設置された琉球大学の一期生として入学する。『琉大文学』文芸部は学生会のクラブ活動の一環として始められたが、その動機は文学的表現の場を作ることであった。こうして『琉大文学』は1953年に創刊された。なお、新川は辺土名高校の代用教員を務めるため、3号から5号までは編集者を外れており、6号から編集者に復帰している²¹。

(2) 6号における転換と沖縄民族意識

このような経緯を経て『琉大文学』は刊行された。先行研究でたびたび指摘されているが、6号が『琉大文学』にとって重要な転換点であった。先述したように、その転換を鹿野は「芸術至上主義から社会主義リアリズムへの」転換と一般的に捉えられているとし、その意義をあらゆる権威への「総否定であった」とする²²。

しかし、6号における転換にはもうひとつ重要な意味があった。新川による作品および論考からは6号から強烈な沖縄への民族意識が見て取れるのである。6号の「船越義彰試論」では「吾々の言葉を愛し、吾々の島の文化を愛しておればこそ、そして二十世紀に生きるものとして現状に安易に背反したり、無関心を装ったりすることは、少なくとも詩人しても許せないのではなかろうか」と記している²³。このころから新川は自分自身を日本民族で

はなく沖縄民族として明解に認識していた。新川は『琉大文学』創刊号から5号まで詩や短編小説を掲載しているが、それらの作品に沖縄民族意識を感じさせるものはない。それこそ身の回りや亡き父を主題にするなど、極めて私小説性の高いものであった。また、『琉大文学』全体を通して、創刊号から5号までは沖縄文化や伝統に直接向き合った作品や評論はほとんどない²⁴。しかし、6号には「琉歌研究の一考察」（中村龍人）、7号では「戦後沖縄文学の半生と課題」（座談会）、「沖縄文学の課題」（川瀬信＝川満信一）、8号では「状況の絵画」（喜舎場順＝喜舎場朝順）、「新しい演劇運動の為に」（池澤聡＝岡本恵徳）など、文学や美術、演劇を題材とした沖縄文化と伝統に関する批評が続く。

『琉大文学』以外にも、新川は母校であるコザ高校の創立10周年記念誌に「僕たちの民族が帰るべき所へ帰し、民族的な独立を勝ち取るための困難な仕事の強力な武器として文学を考え、文学を勉強しようという意味である」と記している²⁵。

沖縄民族意識を特に印象付けるのが、9号で行われた座談会「沖縄に於ける民族文化の伝統と継承」である。新川明や川満信一、池澤聡（岡本恵徳）らはもちろん、大城立裕や太田良博らも参加したこの座談会での新川の発言は以下のとおりである。

沖縄に限らずその国なり、地方なりの文化や伝統とか云った場合、どうしても民族的なものときりはなせないと思います²⁶。

正しく民族的であるのは正しく政治的であり、正しく政治的であるとは、全人民と共に政治に対して正面から取り組んで行くと云うことです。いままでの所、皆さんの御意見は、吾々の文学を人民と結びつかせる云う点では一致しましたが、人民大衆との結びつきも結局、われわれの民族的な独立の中でしか出来上がらないものであり、民族的な結びつきと云い、人民との結びつきと云うことは社会権力への無関心から到底生まれるものではないのです²⁷。

後の米軍当局による弾圧から『琉大文学』メンバーを擁護した副学長、仲宗根政善による以下のコメントによって、この強烈な民族意識はより際立つ。

琉球民族と云うような呼び方をする時に、我々はしばしば言葉にあやまれる。琉球は日本の一地方である。〔略〕日本々土に匹敵するような、而もそれとはちがった伝統を無理にもとめようとしても徒勞であろう²⁸。

このように、6号からの転換は、社会主義リアリズムのみならず沖縄民族意識の目覚めでもあったといえよう。民族意識の覚醒に強く影響を与えたのは、日本の文学論争であった。そこで次節では、新川が影響を受けた日本の文学論争として最初に社会主義リアリズムを、次に沖縄民族意識と強く関わる国民文学論に焦点を当てる。

3 沖縄における日本の文学論争の受容

(1) 社会主義リアリズムの影響

当時の新川の主張において一貫しているのは、文学は私的領域に留まらず絶えず社会へ批判的な姿勢をとらなくてはならない、ということである。そしてその標的はすでに沖縄の文壇・画壇で活躍していた先輩格にあたる世代であった。

まず新川が批評の題材として取り上げたのは詩および小説であった。1954年に刊行された『琉大文学』6号の「船越義彰試論—その私小説的態度と性格について—」がその端緒となる。「船越義彰試論」では、その私小説性を批判し近代的自我の成立が必要であると説いた。すなわち、詩を書く動機として船越が「ただ漠然と書く」と述べたことに対し、新川はその姿勢を叙情的で非現代的でありノスタルジーの中で詩を弄んでいるに過ぎないと批判した。さらにこの姿勢が現代沖縄詩壇の貧困と低調の原因であるとしている。そして叙情的で非現実的な姿勢から脱却し、近代的な自我の確立と新しい文学の創造の必要性を訴えている²⁹。

7号の「戦後沖縄文学批判ノート」では、新城が指摘しているように、前半で沖縄戦文学に対する批判を行っている。そこで新川は、単に沖縄の被害を強調するだけではセンチメンタリズムに陥ってしまうと危惧を示す。すなわち、ひめゆりに象徴されるように、彼女たちが犠牲者となってしまった原因を究明することが不可欠であるという。そして、その原因として、日本の天皇制絶対主義を指摘している。論考の後半では太田良博による「黒ダイヤ」への批評が中心となっている。戦時から終戦にわたってインドネシアを見聞した太田による「黒ダイヤ」は、戦中および戦後直後における民族解放運動を行っている現地少年との親交の物語である。新川はこの現地少年との親交を私的關係のみによって描かれていることに不満を表す。英軍と戦う少年への「私」のまなざしは、かつてのインドネシアへの侵略者であった日本軍のままであり、少年が属する解放軍を「敵」とみなしているのと同様であるという。そして新川が作者に求める姿勢は、「英軍と戦う解放軍の苦悩は吾々沖縄と同じであることを看破し、社会の全体構造を把握した上で力強い人間を描くべきである」というものであった³⁰。

新川は他の作品を取り上げる際も、一貫して作者の持つ私小説性を批判する。新川にとって社会構造を見ることのできない私小説性は、沖縄戦後文学全体に共通する欠陥であった。

ほぼ同時期に新川は短歌への批評も行っている。1954年、『琉球新報』紙上で行われた「短歌に対する疑問—九年母短歌会の人達に—」と題された連載でも、文学と政治および社会の問題が議論されている。九年母短歌会は当時の沖縄で活動していた短歌の同人会であるが、その主要メンバーの短歌に対して新川は、叙情的で社会性に欠けると指摘した。31音の短歌で社会批評を行うことは困難であるとは認めながらも、その限界性への疑問を少しも感じない歌人たちを「アララギ調」「今日的意義のあるはずもありません」「古い歌よみ

でしかありません」とぼっさり断じている³¹。ここでも前述したように、社会への批判を求める姿勢が如実に表れている。

その批評の矛先は文学のみに留まらず、美術へも向かう。9号で喜舎場順と連名で書かれている「美術時評 人間の居ない場所」では、沖縄で最大規模を誇る美術展である「沖展」への批評という形で、当時の沖縄画壇を評している。画壇批評に際しても画家たちの姿勢を芸術至上主義と規定し、伊佐浜と伊江島の米軍による土地接収に婉言しながら、沖展のお祭り騒ぎは植民地的華やかさを持っていると皮肉る。そして新川らは画家たちが有する政治的無関心の変革を目指す立場から批評を行うと宣言するのであった³²。

以上が新川による詩、小説、短歌および美術への批評である。繰り返しとなるが、そこで一貫しているのは、私的領域に留まることへの痛烈な批判であり、沖縄がおかれている抑圧構造に対峙する姿勢を作家たちに求めている。このような新川の背景として、先行研究においても幾度か指摘されている、日本本土にて行われていた文学論争の影響を強く受けていることがあげられる。鹿野は『詩学』や『荒地』の影響を指摘し³³、新川は小熊とのインタビューで当時読んでいた雑誌として『新日本文学』『近代文学』『詩学』『歴史評論』『美術批評』をあげている³⁴。

新川が一貫して主張した私小説性への批判と政治への関心からは、社会主義リアリズムの影響が読み取れる。『琉大文学』8号では1946年から49年にかけて『近代文学』と民主主義文学運動に携わる側の間で「政治と文学」論争が行われたと言及し、「あの論争と同質なものがわれわれの中で幼稚ではあるが、自覚的に話し合われるようになった」と述べている。また、「『社会主義リアリズム』というものがどのようなものであるか知らない。それをこれから勉強し、僕たちの芸術表現（詩や小説にしろ、批評にしろ）の強力な武器にしたいと希んでいる」という表現もある³⁵。さらに1957年の時点では、明確に「54年から56年までの琉大文学の歩みは、本土の民主主義文学の砦『新日本文学』を旨としたものだった」と位置づけている³⁶。

『新日本文学』は日本共産党の宮本百合子や中野重治らによって1946年に創刊された。その基本的性格は、戦前から続くプロレタリア文学に反省を加えつつ、民主主義文学の名の下に日本文学を新たに発展させていく、というものであった。その中心は戦前のプロレタリア文学の流れを汲む文学者であり、終戦によって復権した日本共産党の強い影響下にある雑誌であった³⁷。

(2) 国民文学論の影響

同時期の新川の主張には国民文学論の影響も散見される。比較的初期の批評の中で直接的な記述が見られる。例えば7号の「戦後沖縄文学批判ノート—新世代の希むもの—」では以下のように記している。

本土の古い世代をも含めて自覚的な文学者たちの間で、ようやく具体化され、深化

されつつある国民文学運動などをおもう時沖縄が南海の孤島だというだけでなく本土と切り離されて占領下の社会にあるという点でも、二重三重の悲しみである³⁸。〔略〕

吾々もこのような国民文学への道をはつきり自覚して吾々の文学を押しすすめていかねばならぬ³⁹〔略〕

国民文学の一要素である沖縄の郷土文学も真にそれを全住民のものとなし、国民文学の一翼たらしめるためには今後強力にこのような文学運動を展開しなければおよそ空しいものとなるだけであろう⁴⁰

ここで述べられている国民文学は日本全体を指すものであり、沖縄文学はその一部とされている。それはすなわち、日本の一部としての沖縄という認識である。

しかし、興味深いことに 1954 年の 8 号以降は直接「国民文学」という文言は現れない。むしろ、沖縄民族を意識した言説が多く発言されるようになっていくのは前節で見たとおりである。このことは新川が国民文学論に刺激されて沖縄民族意識を高めた結果である、と想像することは難くない。そして、沖縄民族の独自性を認識した新川は、国民文学論が目指す日本民族との距離感を感じ取ったゆえに、国民文学論という用語を使うことを回避したのではないだろうか。換言すれば、日本民族の創造を志向する国民文学論を、沖縄民族創造志向に解釈した、ということである⁴¹。

(3)日本の文学論争の受容

以上のように新川の論考からはマルクス主義リアリズムと国民文学論の影響が強いことが見て取れる。1954 年の時点で以下のような表現を見ることができる。

多くの問題をもちながら未解決のまま今日に至っている「主体性」論争や、宮本百合子をめぐつての民主主義文学運動内の論争など、いくたの模索の中での歩みだつたのだ。そして更には近年国民文学運動そして一つの目標に向い、あらゆる角度の力を結集しつつ押しすすめられて来ているのである⁴²。

しかしここで確認しておくべきことは、国民文学論は戦前のプロレタリア文学運動への批判から生まれた思想である、ということである。国民文学論を唱えた人物としては竹内好や小田切秀雄が知られている。竹内と小田切は 1930 年代のプロレタリア文学運動の失敗を踏まえて、「日本的自我」と日本国家を確立する必要を訴えた。すなわち、従来のプロレタリア文学運動は階級闘争を絶対化、万能化し、民族意識の涵養を軽視していた。そしてプロレタリア文学運動のいう自我は階級闘争という西洋的思想を持ち込んだものに過ぎず、それは誤謬であるとした。民族・国民意識の確立と自我の確立は決して矛盾するものではなく、むしろ近代国民国家確立の必須条件であると主張された⁴³。

さらには、民族意識を捨て去るということは、戦争責任を回避するということでもあつ

た。竹内によれば、民主化や近代化など西洋からもたらされた概念のみに依拠した議論は「ドレイ根性」以外のなにもものでもなかった。西洋から導入した概念のみに依拠するのではなく、日本人が「血まみれた民族」であることを認め、戦争責任を直視することが必要とされた。それによって初めて、「自己改革」を遂げ「自主的な近代」を獲得することができる、というものであった⁴⁴。

このような日本において国民文学論が誕生、展開してきた背景は、新川の論考では一切語られていない。例えば、「戦後沖縄文学批判ノート」では、日本における戦後文学の出発点について「過去の日本文学と作家に対する幻滅と不信であった」という部分を『日本の現代文学史』⁴⁵から引用し、「本土の戦後文学は私小説という過去の文章に対するアンチ・テーゼ」であったと解説している。しかし、出典の『日本の現代文学史』では私小説へのアンチ・テーゼが解説されている箇所⁴⁶の3ページ前に、プロレタリア文学批判として登場した『近代文学』同人たちについて述べられている⁴⁶。新川は日本のプロレタリア文学批判については触れていないのである。

この理由としては、『琉大文学』以前の沖縄の文壇において、プロレタリア文学運動がある程度の勢力として見られなかったことが考えられる。少なくとも、新川が標的とした作家らについては、プロレタリア文学運動を実践していたという形跡はない。新川も批判の対象としてのプロレタリア文学には一切言及していない。新川が先輩世代を批判する際に問題とするのは、私小説性と芸術至上主義のみである。

その結果として新川の論考においては、国民文学論および民族意識とマルクス主義リアリズムが齟齬を来すことなく共存することとなった。『琉大文学』9号で行われた座談会「沖縄に於ける民族文化の伝統と継承」で新川は以下のように述べている。

民族文化を人民と対立させて考えるのではなく、「民族文化はプロレタリア文化に内容を与え、プロレタリア文学は民族に形式を与える」と云われていますが、その意味で広く人民に〔沖縄の文化を〕解放すると云うことが大切だと思います⁴⁷

マルクス主義リアリズムや国民文学論が渾然と語られるもう一つの要因には、佐々木基一や小田切秀雄が好んで引用されていたこともあるだろう。『琉大文学』8号には佐々木の本ほしさにサンドイッチマンのアルバイトをするエピソードが語られている⁴⁸。

佐々木も小田切も戦中はプロレタリア文学運動に関連を持っていた。しかし戦後は『近代文学』創刊の同人となり、『新日本文学』を中心とする旧来のプロレタリア文学を批判するようになる。そこでは思春期、すなわち思想形成において重要な時期を戦中に過ごした三十代の使命として、戦中にいわゆる「転向」した文学者たちの責任を問うことになる⁴⁹。

4 先輩世代に対する抵抗心

(1) 痛烈な批判

新川明の抵抗心も一つ上の世代へと向かった。その語気は激しい。

〔佐々木基一のいうような〕「東洋的無常観」すらこの〔通俗小説を書く〕「大家」たちはあの戦争と敗戦を通じて感ずることの出来ない精神的白痴でしかなかったではないか。〔略〕「沖縄の大家」たちは戦争—敗戦の傷痕はおろか、安逸と瀨墮の上にねそべっている、およそ文学とは無縁の、そして沖縄に生活する人民の一人としても否定さるべき存在なのだ⁵⁰。

僕たちは絶えず前の世代にも働きかけ、その独善性に挑戦し、その非民主々義的なものへはくり返し批判することによつてこそその相互の固い結びつきも可能であることを信じる。惰眠を貪る人たちへの覚醒剂的な役目でも果たせば俸せというものだ⁵¹。

このような痛烈な批判を展開した新川であるが、その理由に関しては歯切れが悪くなる⁵²。もっともらしい理由としては、次のような文章が確認できる。

何故ならば第二次世界大戦という拭うべくもない犯罪行為の無意識にしろ加担者であり、汚れた手の持ち主でもある旧い世代への僕たちの不信は大きいからだ。僕たちはこれからの生きる問題として大人たちのそのような精神の位置について無関心ではおれない⁵³

しかし次号において新川はこの発言を「世代的な不信を、観念的に第二次世界大戦にむすびつけて大人一般に適用したことは少々性急だつたように思う」と訂正する⁵⁴。なぜ新川はこのような「少々性急」なことを書いてしまったのだろうか。

(2) 批判構図の類似

第二次世界大戦への加担を非難するというこの図式はまさに『近代文学』同人達が戦中に社会主義から転向した文学者を非難する構図と同じである。新川が参照した『日本の現代文学史』には戦後派といわれる人々が戦争責任の問題の追及から転向文学の問題について明記されている⁵⁵。また、新川が8号で引用している『近代文学』の座談会の中で、荒正人は戦争責任の問題と転向文学の問題を指摘している⁵⁶。新川の「少々性急」な主張の中身はいわゆる日本の戦後派とまったく一緒であった。

新川は先輩世代を批判するために、日本の文学論争によって理論武装したといえるのではないだろうか。そのために社会主義リアリズムや国民文学論、そして『近代文学』の「三十代の使命」を導入した。その中から「私小説性」や「芸術至上主義」のような先輩世代

批判に使える言葉を取捨選択してきた新川が、誤って「戦争責任」も選択をしてしまった痕跡が、「少々性急」な文言として表出したのではないだろうか。

おわりに

繰り返しとなるが以上のような性格がはっきりするのは6号からである。新川自身も「琉大文学が一応はつきりした性格をもつたのは第6号からですが」「戦後の作家の私小説的態度、あるいは芸術至上主義的な、あるいは功利的商業主義等にはつきり抵抗することにより、植地的な沖縄社会現実の真実の具体的な形象化を図ろうというのが、合言葉になったわけです」と述べている⁵⁷。

先行研究でも指摘されているように、新川を始めとする『琉大文学』の初期メンバーはマルクス主義および社会主義リアリズムの影響が強いとされてきた。しかし、新川の論考の中では本来方向性の違う幾多の雑誌が参照され、それらが共存していた。新川は2004年のインタビューで「沖縄では東京の党派的な事情はよくわからなかったし、ぜいたくを言える状況じゃないから、とにかく手に入る限りは入手して読んでいた」「よく言えばいろんな知識に貪欲だった。悪く言えばいい加減だったというか、思想にもあまり忠実でなかったとも言えるでしょうね」と述べている⁵⁸。

このように異なる思想が雑居できた背景には単に東京の党派事情に疎かったというだけではないだろう。上の世代に対する強烈な抵抗心とその雑居を可能にしたと考えられる。戦後直後の沖縄文壇ですでに活躍していた船越義彰、大城立裕らは彼らにとっていわば権威的存在であった。彼らを批判することを通して自らの存在意義を明確にし、確認する必要があるのである。そのために用いられたのが社会主義リアリズムであり、国民文学論であった。そしてそのために援用したのが、やはり世代間で論争を繰り返した佐々木基一や小田切秀雄の議論であったのである。

このことは単に理論の借り物をするような受動的な態度では決してない。ある目的のために主体的に取捨選択して論理を組み立てたと言えるだろう。このような経緯を経て日本の思想動向の影響を受けた新川は、社会の抑圧構造へと目を向けていく。

『琉大文学』8号は米軍当局の弾圧を受け店頭から回収される。11号は発売禁止となり、4人の部員が処分を受けた。そしてほぼ同時期に沖縄島中部に位置する宜野湾の伊佐浜と、北部の離島である伊江島での土地闘争が勃発した。後に「島ぐるみ闘争」と呼ばれる反米軍運動の端緒である。社会へ目を向けた新川は米軍による圧政から目を背けることはできなくなっていた。そして占領という植地的状況を「祖国の独立が失われ、その植地化基地化が日本全体にわたって進行し、民族が奴隷化されようとするとき、〔略〕自由と幸福をかちとろうとするたたかいを土台として展開されはじめたのが、国民文学の論であり、その創造に向っての多面的な運動である」⁵⁹と表現され議論された日本の文学論争は、新川にとって沖縄においてこそ実感を伴って受け止められたのであろう。ここに、1960年代後

半に成熟する反復帰論の淵源を見いだすことができる。

このように新川は国民文学論の影響によって沖縄民族意識を強めていた。しかしこの頃の新川にとって日本は敵対する存在ではなく、むしろ希望であった。新川の詩には日本への憧憬があることをモラスキーは指摘しているが⁶⁰、『新日本文学』に寄稿した記事からもそのことが窺える。「沖縄の文学事情」と題された記事では、「本土の人たちと手を取り合って共通の目的のためにすすみたいと希んでいます」⁶¹、ルポルタージュ「沖縄の闘いの表情」では、「祖国同胞からは温かい援助と激励の手は伸べられ、共に国土を守り、平和と民族の独立を勝ち取る運動はくり展げられて来たものだった」とある⁶²。当時の新川にとって日本は革新勢力であり、同胞であり、希望であった⁶³。

思想の雑居性、そして権威への抵抗は 1960 年代の反復帰論の中につながっていく。その後、新聞記者として鹿児島および大阪勤務時代の経験から沖縄人民党とは距離をおき、反復帰論を主張する 1960 年代には革新陣営と激しく対立することになる。そのなかで紡ぎ出された反復帰論は権力への抵抗の思想となっていく。

1 「反復帰」という直接の文言こそ登場しないものの、新川明「沖縄の思想的課題とは何か」沖縄研究会編『物呉ゆすど…沖縄解放への視角』（田畑書房、1970年）、27-33頁や新川明「非国民の思想と論理」谷川健一編『沖縄の思想』（木耳社、1970年）、5-72頁など『新沖縄文学』による特集前の論考も、反復帰論へ連なる思索と考えられる。

2 新川明「9条と沖縄米軍基地は不可分の関係にある」『世界』6月号（岩波書店、2005年）。

3 岩崎稔ほか編『戦後思想の名著 50』（平凡社、2006年）、385-396頁。

4 多田治「再考・反復帰と独立」『琉球新報』（2007年1月29日）。

5 多田治『ウチナー／ヤマト』をめぐる現実の複雑さと二重性』『環』第30号（藤原書店、2007年）、289-292頁。

6 仲里効『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』（未来社、2007年）。

7 田中優子「反復帰論が問い続けるもの—国家に拠らない、真の自立のために—」『週刊金曜日』第19巻第20号（金曜日、2011年）。

8 藤澤健一編『反復帰と反国家』（社会評論社、2008年）。

9 新川明『反国家の兇区』（社会評論社、1996年a）、397頁。

10 同上、303-306頁。

11 同上、81頁。

12 新川明・池澤夏樹「沖縄独立の夢を語ろう」『世界』8月号（岩波書店、1996年b）。

13 「第一次琉大事件」は1953年に起きた学生運動リーダーに対する処分を指す。なお、『『有色人種』抄』掲載時、新川自身はすでに沖縄タイムス記者であり処分を受けていない。「第2次琉大事件で新事実／発端は『琉大文学』／学長、職を賭し学生擁護」『琉球新報』（2006年9月22日）、山里勝己『『ミード報告』を読む／第二次琉大事件から50年（1～2）』『琉球新報』（2006年9月27日、10月11日）。

14 新城郁夫「戦後沖縄文学覚え書き—『琉大文学』という試み—」『『戦後』という制度—戦後社会の起源を求めて—』（インパクト出版、2002年）。

15 Molasky, Michael. S. "Arakawa Akira: The thought and poetry of an iconoclast." Hook, Glenn. D. (eds). In: *Japan and Okinawa: Structure and subjectivity*. London and New

York: Curzon Press. 2003.

- 16 呉屋美奈子「戦後沖縄における「政治と文学」—『琉大文学』と大城立裕の文学論争」『図書館情報メディア研究』第4巻第1号（「図書館情報メディア研究」編集委員会、2006年）。
- 17 浜川仁「脱『沖縄文学』論—50年代中期『琉大文学』をめぐる」『うらそえ文芸』（「うらそえ文芸」編集委員会、2006年）。
- 18 新川明・小熊英二「沖縄現代史と＜反復帰論＞（インタビュー）」『InterCommunication』第47号（NTT出版、2004年）、126-129頁、新川明ほか「反復帰論と同化批判—植民地下の精神革命として（座談会）—」『季刊前夜』第9号（NPO前夜、2006年）、65、70頁。
- 19 新川明「わたしも独立論者だ—「反復帰・反国家」と「独立」のあいだで—（インタビュー）」『うるまネシア』第5号（21世紀同人会、2003年）、5-6頁。
- 20 新川・小熊、前掲、112-113頁。
- 21 新川、前掲（2003年）、8-9頁。
- 22 鹿野政直「『否』の文学—『琉大文学』の航跡—」『戦後沖縄の思想像』（朝日新聞社、1987年）、128-132頁。
- 23 新川明（新井暁）「船越義彰試論—その私小説的態度と性格について—」『琉大文学』第6号（琉球大学学芸部、1954年a）。
- 24 5号における川満信一（川瀬信）の小説「流れ木」は米軍基地と故郷としての沖縄、不正義や権力に着目した作品である。この作品は6号の転換を予感させる一編となっている。
- 25 新川明「新しい文学芸術の課題について」『緑丘（十周年記念号）』第3号（コザ高校文芸クラブ、1955年d）、34頁。
- 26 新川明ほか「沖縄における民族文化の伝統と継承（座談会）」『琉大文学』第8号（琉球大学学芸部1955年a）、8頁。
- 27 同上、13頁。
- 28 同上、14頁。
- 29 新川、前掲（1954年a）。
- 30 新川明「戦後沖縄文学批判ノート—新世代の希むもの—」『琉大文学』第7号（琉球大学学芸部、1954年b）。
- 31 新川明「短歌に対する疑問—九年母短歌会の人達に—（1）～（7）」『琉球新報』（1954年9月27日～10月3日）。
- 32 新川明（北谷太郎）・喜舎場朝順（喜舎場順）「美術時評 人間の居ない場所」『琉大文学』第9号（琉球大学学芸部、1955年c）。
- 33 鹿野、前掲書、129頁。
- 34 新川・小熊、前掲、127頁。
- 35 新川、前掲（1955年d）、52頁。
- 36 新川明「文学者の主体的出発ということ—大城立裕氏らの批判に答える—」『沖縄文学』第1巻第2号（沖縄文学の会、1957年）、40頁。
- 37 住谷悦治ほか編『戦後日本の思想対立』（芳賀書店、1967年）、32-37頁。
- 38 新川、前掲（1954年b）、29頁。
- 39 同上、39頁。
- 40 同上、39頁。
- 41 本章の元となった初稿発表後、新川の「国民文学論」による沖縄民族志向性への解釈について我部聖氏より疑問が提示された。その理由は「新川が他の同人の発言やその発言へ

の対し方にも注目する必要がある」「新川の批評や詩表現の展開を見ると、『沖縄民族の独自性』や『沖縄民族の志向性』にくくりとることのできない思考の広がりを見ることのできるから」としている。この「思考の広がり」は『民族文化』を通して第三世界とつながりうる、新たな『連帯』の可能性を指しているが、その点について筆者は何ら疑義を有しない。ここではそのような他民族との連帯の可能性をもたらす「思考の広がり」を促したのが新川の自らの民族性へのこだわりであり、その触媒となったのが日本の国民文学論であったということを確認しておきたい。我部聖「『日本文学』の編成と抵抗—『琉大文学』における国民文学論—」『言語情報科学』第7号（「言語情報科学」編集委員会、2007年）。

42 同上、36頁。

43 内藤直由「国民文学論の理路と隘路—天皇制をめぐる言葉—」『立命館文学』第600号（立命館大学文学部人文学会、2007年）、1010-1011頁。

44 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞』（新曜社、2002年）、436-439頁。

45 日本現代文学史研究会『日本の現代文学史』（三一書房、1954年）。なお、7号の「戦後沖縄文学批判ノート—新世代の希むもの—」には『現代の日本文学史』と記載されている。

46 同上、280-283頁。

47 新川、前掲（1955年a）、9頁。

48 新川明「スナップ」『琉大文学』第8号（琉球大学文芸部1955年）、59頁。

49 住谷ほか、前掲書、25-31頁。もっとも、小田切秀雄は後に『近代文学』を脱退している。

50 新川、前掲（1954年b）、30頁。

51 新川、前掲（1955年c）、47頁。

52 1979年における回想では、当時の沈着している論壇を活発させたいという意志があったと述べている。新川明「安谷屋正義の周辺—私的回想による人と作品の覚え書—」『安谷屋正義回顧展』（安谷屋正義回顧展実行委員会、1979年）。

53 新川明（北谷太郎）「批評・その位置と態度われわれ内部の問題（3）」『琉大文学』第10号（琉球大学学芸部、1955年d）、50頁。

54 新川明「僕たちの批評態度について（承前）」『琉大文学』第11号（琉球大学学芸部、1956年a）、45頁。

55 日本現代文学史研究会、前掲書、280頁。

56 佐々木基一ほか「戦後における批評の問題（座談会）」『近代文学』1月号（近代文学社1955年）、64頁。

57 新川、前掲（1957年）、8頁。

58 新川・小熊、前掲、128頁。

59 日本現代文学史研究会、前掲書、298頁。

60 Molasky, *op. cit.*

61 新川明「沖縄の文学事情」『新日本文学』7月号（新日本文学会、1956年b）、108頁。

62 新川明「沖縄の闘いの表情」『新日本文学』11月号（新日本文学会、1956年c）、40頁。

63 新川は2004年の時点では下記のように振り返っている。「新しい憲法を持つ生まれ変わった国としての日本というものが希望として輝いて見えたわけですよ。その輝きを支えている部分を具体的に言えば、いわゆる革新的な政党とか勢力であった」。新川・小熊、前掲、135頁。